黄色いかばんをおいかけろ！

ソフィヤ・プロコーフィエワ 作
島原落穂 訳　かみやしん 絵

黄色いかばんを おいかけろ！

1985年 4 月25日初版発行©

作　ソフィヤ・プロコーフィエワ
訳　島原落穂
絵　かみや　しん

発行所　株式会社童　心　社
東京都新宿区三栄町22
電話 03（357）4181（代表）
振替　東京1－75504
写植　東京光画株式会社
印刷　東京光画株式会社
表紙　小宮山印刷株式会社
製本　サン・ブック株式会社

B5変型・18.2cm×22.0cm　124P・NDC983
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。
ISBN4-494-02022-2

黄色いかばんをおいかけろ！

ソフィヤ・プロコーフィエワ 作
島原落穂 訳
かみやしん 絵

Софья Леонидовна Прокофьева
ПРИКЛЮЧЕНИЯ ЖЕЛТОГО ЧЕМОДАНЧИКА
©Издательство《Советская Россия》Москва 1983

本書は，日ソ著作権センターを通して，
在モスクワソ連邦著作権協会との契約に
基づき発行されたものである。

ちくじ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

1 小児科のおいしゃさま……8
2 おくびょうペーチャ……21
3 ワレンチン・ベジョールキンさんとおばあさん……32
4 非常ばしごの上で……43
5 わらわない女の子……55
6 ペーチャ、もうけっしてなかないと決心する……63
7 とっても高くて、とっても長いへい……74
8 もう一度、とっても高くて、とっても長いへい……85
9 飛行場……91
10 サーカスげきじょう……102
11 そういうわけだったのか……111
訳者あとがき 120

黄色いかばんをおいかけろ！

1 小児科のおいしゃさま

あかるいお日さまの光と、子どもたちのわらい声。小児科のおいしゃさまは、目をさました。

おいしゃさまは、まいにちまいにち、朝からばんまで、子どもたちのわらい声をきいていてもへいき。おいしゃさまの、世界じゅうで一番すきなもの音は、それは、子どものわらい声だった。

アパートのなかにわで、子どもたちがあそんでいる。わらっている。

ときどき、下の方から、おいしゃさまのまどに、銀色のふん水が、ふきあがってくる。おにわのまんなかに、大きなくじらでもいるみたい。でも、そんなことありっこないって、おいしゃさまは知っている。あれは、おそうじのアントンおじさんが、お花に水をやってるんだ。

「わたしは、ちょっとつかれてるな」って、おいしゃさまは思った。

ちかごろ、とってもいそがしかったんだ。まいばんまいばん、本をかいていたんだ。

『子どもがまともなおとなになるために、とっくみあいのけんかは必要か』っていう題の本なんだ。

おいしゃさまは、昼間は、子ども病院ではたらいている。病院のしごとがおわると、本をかくためのしりょうをあつめに、けんかをさがしにいく。あっちこっちのにわや、公園を歩きまわったり、どこかのくらい玄関に入りこんだり、階段の下まで、のぞいてみたりする。

「きょうは、子ども病院に、いかなくてもいいんだ。うれしいなあ」って、おいしゃさまは思った。

「わたしは、きょうは休めるんだ。ひょっとしたら、あの本のだい七しょうを、かきあげられるかもしれないぞ。きょうは、往診がふたつあるだけだものな。もっとも、ひとりはかなりおもい病気だが。あのわらわない女の子のトーマは……。」

そのとき、りりりーんと、ベルが大きくなりひびいた。

おいしゃさまは、玄関にいって、ドアをあけた。

ドアのそとには、おかあさんが立っていた。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

もちろん、おいしゃさまのおかあさんじゃない。どこかの男の子か、女の子の、おかあさんだ。でも、たしかにおかあさんだ。かなしそうな目を見れば、おかあさんだとすぐわかる。

小児科のおいしゃさまは、そおっとためいきをついて、その、だれかのおかあさんを、へやにとおした。

それは、とってもいいおかあさんだった。おいしゃさまは、すぐ、いいおかあさんだって、わかった。

こんなおかあさんなら、きっと、きびしくしつけることもできるだろう。

けれど、また、こんなおかあさんなら、きっと、自分の子どもが木のぼりをしても、はだしで水たまりをかけまわっても、とめたりなんかしないだろう。

おいしゃさまは、かんがえた。

「このおかあさんは、とっくみあいのけんかを、どうかんがえてるかな？　このひとのかんがえは、わたしの本、『子どもがまともなおとなになるために、とっくみあいのけんかは必要か』にとって、大切だと思うが……。」

「あのう、せんせい……。」

おかあさんが、心配そうに、はなしはじめた。

おかあさんの目は、とってもくらくて、かなしそうだ。でも、この目も、きらきらかがやくことだって、きっとあるにちがいない。

「せんせい……、わたくし、せんせいにご相談するようにと、みなさんにすすめられて……、わたくしには、ペーチャという男の子がおります。九才ですの。ペーチャは、ひどい病気なんです。ねえ、せんせい……、ペーチャは、おくびょうで……。」

おかあさんの目から、すきとおったなみだが、ほろほろとこぼれた。まるで、きらきら光るビーズがふたすじ、ほっぺたにぶらさがっているみたい。おかあさんは、ひどくつらそうだった。

小児科のおいしゃさまは、こまってしまって、そっぽをむいた。

おかあさんは、はなしつづけた。

「たとえば、朝早く……、目がさめると、すぐ……、いいえ、たとえば、学校からかえってくると、すぐ……、夕方は……。」

「なるほど、なるほど。」おいしゃさまが、さえぎった。

「なるほど、だが、ちょっとまってくださいよ。ちょっとね。あなたは、わたしの質問にこたえてください。その方が、いいでしょう。学校へは、ひとりでいきます

か？」
「おくっていって、むかえにまいります。」
「映画は、見にいきますか？」
「もう一年半も、いっておりません。」
「いぬを、こわがりますか？」
「ねこさえ、こわがって……。」
おかあさんは、小さな声でこたえると、しゃくりあげた。
「わかりました。わかりましたよ！　だいじょうぶですよ。げんだいの医学は……、あ、あした、病院にきてください。十二時に、予約しておきましょう。十二時でいいですか？」
「病院に？」
おかあさんは、おろおろした。
「ねえ、せんせい。あの子は、病院にはまいりません。どんなことがあっても、けっしてまいりません。わたくし、力ずくであの子をつれてはいけませんわ。そうお思いになりません？　わたくし、せんせいが、うちにきてくだされば、いいと……、わたくしどもの家は、そんなにとおくはありませんの。百二番のバスで……。」

「いいですよ、いきますよ。」
おいしゃさまは、ためいきをつきながら、自分のつくえの方を、かなしそうにちらっと見た。
「どっちみち、わたしは、これから、レールモントフ通りの、わらわない女の子、トーマのところに、いかなければならないんだから……。」
小児科のおいしゃさまは、小型のかばんのなかに、おくすりを入れはじめた。かばんは中ぐらいくたびれていて、あたらしくも、ふるくもなく、黄色で、金具が光っている。
「ちょっとまってくださいよ、ちょっとね。わすれものをしないように、しなくっちゃ！　このこなぐすりは、わらわない女の子、トーマのわらいぐすり。とってもよくきくくすりだが……、もしも、これできかなかったら、どうするかな。さて、と……、この水ぐすりは、しゃべりどめ。そう、そう、のむまえに、よくふらなくちゃな。これは、おしゃべりぼうやに、のませるくすりだ。さて、おたくのペーチャくんには……。」
「すみませんけど、せんせい……。」
おかあさんが、また、こまったようにいいだした。

「ごしんせつに、ありがとうございます。でも、うちのペーチャは、おくすりはいっさいのみませんの。こわがってるんですわ。ペーチャは、ソーダ水ものみません。しゅうしゅういうのが、こわいんですわ。スープも、わたくし、あさいおさらによそってやります。あの子は、ふかいおさらからのむのが、こわいんですの。」

「とうぜんです、とうぜんですとも……。」

おいしゃさまは、もの思わしげに、つぶやいた。

おかあさんの目が、ひどくびっくりしたように、ふだんの四倍もの大きさになった。

「せんせいは、とうぜんだとお思いですの？」

「この病気では、とうぜんだといったんですよ。」

おいしゃさまは、かみぶくろに、なにやら入れながら、

「そういう子どもには、わたしは、キャンデー型のくすりをだします。ごらんなさい。ピンク色のつつみがみで、ふつうのキャンデーそっくりでしょう。どんなにおくびょうな子どもでも、これならへいきで口に入れますよ。」

おいしゃさまとおかあさんは、おもてにでた。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com